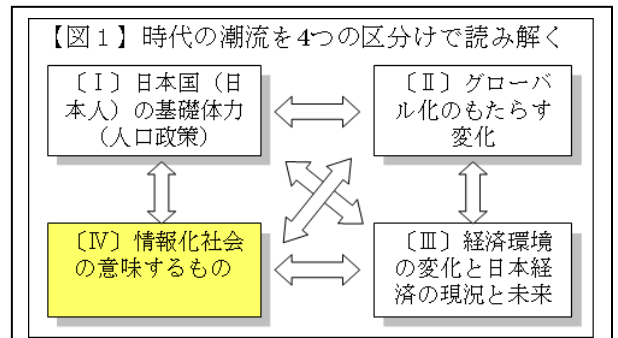


第 5 回 ( )時代の潮流を読む・・・ (2) 情報社会の意味するところは何か？

前回メルマガ(第4回)では、日本の経済環境の基本状況を簡単にレビューしました。現在、残念なことに金融危機による世界中の流動性逼迫が与えた経済停滞への影響は、实体经济面で、外需中心の産業構造の日本に最大のダメージを与えています。

今回は、(2) 情報化社会の意味するところについて理解を深めたいと考えます。

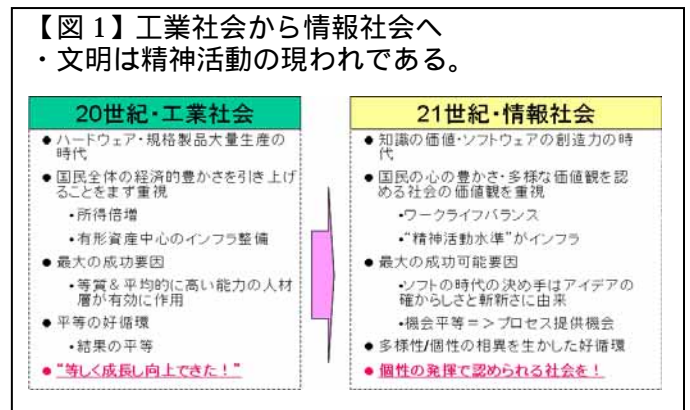


**知価社会**

21 世紀を特徴付ける時代のキーワードは、「情報社会」であります。「情報社会」の語について、Wikipedia の冒頭部分では次のように解説されています。

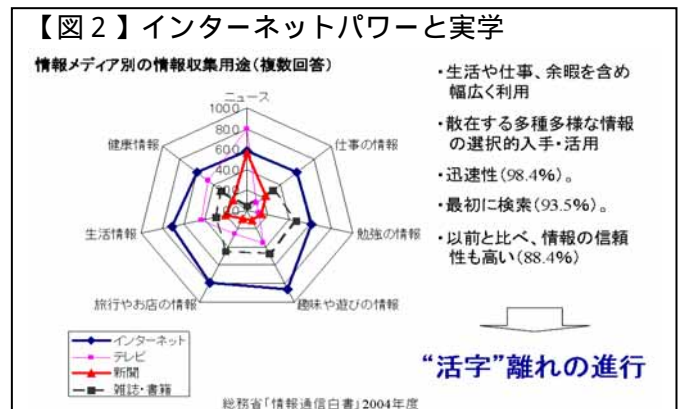
「1990 年代半ば以降、インターネットや携帯電話の普及に伴い、情報社会や情報化社会の語、概念は広く用いられるようになったが、着想は 1960 年代前半にまで遡るとされるのが普通である。基本的には、批評家、未来学者、官僚、社会学者など、時代の変容や大規模な社会変動を考える人々によって多く用いられてきた語である。情報社会のあり方を予測したものや、あるべき姿を提唱したものは、一般的に「情報社会論」と呼ばれる。」

情報社会を表す標語として印象深く記憶するのは、堺屋太一氏による「知価社会」というネーミングです。それは「時代を動かすエンジン」、あるいは「人々の中心的行動原理となって諸々の活動の方向性と動機づけを支えるドライビング・フォース」が変化することを象徴する言葉としてとても新鮮でした。「情報社会」の用語は、それまでの時代を表現する「工業社会」という「概念」との対比の中で、本質的な相違を例えば、



【図 1】のようにイメージさせてくれます。時代のパラダイム転換を概念化し象徴する言葉です。

科学技術としてのテクノロジーの発展の面から「工業社会」と「情報社会」を明確に区分する区分点は、やはり「インターネットの世界的普及」にあります。90 年代半ばから本格的に、家・オフィス・外出先(モバイル)などあらゆる空間をシームレスにつないで、個人の活動の隅々に情報化の利便性が行き渡るようになりました。



こうした情報技術のプラットフォーム化が「情報社会」を支える「環境(人工物が支える)」です。現在、従来の媒体に変わって、インターネットが情報収集のエントリーポイントとして幅

広く普及しています「情報社会」の「概念」は、私たちが属しているビジネスの世界での付加価値を生み出す中心となるものが「知識」や「知恵」に希少価値を見出す時代へ移行していくことを象徴します。規格が同一で大量に生産し大量に消費する社会を工業社会と特徴づける一方、情報社会は、サービスやプロダクトに対して人々がより高い価値を認めて消費する対象が「知価」「個性」「多様性」に移行することを意味します。例えばお金の使い方を見ると、今の日本では携帯電話には毎月 2 万円前後も費やす若い世代は、他方で自動車には興味を持たなくなっています。

### 分かちもたれた知能 (“Distributed Intelligence”)

「情報社会」は、「組織人」としての枠組みから、「個人」としてのコミュニティの形成にその情報行動様式をシフトしていくことも表しています。その代表的な現れが、オープンソースのソフトウェア開発のメカニズムに現れていますし、百科事典が、Wikipedia の説明内容を世界中に広がった個人のコメントの集積で組み上げられていく様に示されています。Wikipedia の full-time employee は 2 人だが、協力者の数は 36,000 人以上とされています。ビジネスの組み立て方も、Collaboration という場合には、会社と会社の提携を超えて、個人単位の協調行動をも意味していく時代になってきています。SNS も同様なコミュニティワークを表現しています。日本ではこの点でも遅れを取ってはいないでしょう。

このことは、知能（知識や知恵）が人々のつながりのネットワークの中に、広く分散されて存在していくこと、すなわち、「分かちもたれた知能 (“Distributed Intelligence”)」〔脚注<sup>1</sup>〕という概念と呼ばれます。情報スーパーハイウェイの普及を後押しした米国の元副大統領のアル・ゴア氏は、一方で情報技術としてのインターネットの普及を推し進めたのですが、それと同時に並行して「これからの科学技術の基本政策は、分散された知能を基本メタファ〔脚注<sup>2</sup>〕とすべき」と述べているとのこと。つまり、「従来の hierarchical なシステムではなく、分散協調型の heterarchical なシステムへの移行が重要である」と述べています。〔脚注<sup>3</sup>〕

#### 【図 3】分かちもたれた知能

- 知能は分かちもたれるもの：「これからの科学技術の基本政策は、分散された知能-を基本メタファ\*とすべき」アル・ゴア氏（\*根本的な認知能力のひとつ）
- 従来の中央集権的な階層的-hierarchical-なシステムではなく分散協調型の heterarchical なシステムへの移行すべきである。

“どこが中心になるかは、その問題毎に決まる。”

マネジメントのあり方も、Emergent Leadership (湧き上がる) が中心となるべきである。=> “チーム”によるマネジメント

### チームによるマネジメント

このことは、リーダーシップのあり方についても変化を生むこととなります。多様なタレント（専門性）が束ねて活用できる力が求められます。「どこが中心になるかはその問題ごとに決まる。」というコンセプトを引き出すこととなります。

科学技術の進歩は専門領域の細分化を推し進めてきたのですが、人々の生活や社会活動の幸福

<sup>1</sup> Salomon Gavriel 編著、松田文字監「現代基礎心理学叢書 分散認知」“Distributed Cognition”，協同出版，2004

<sup>2</sup> おそらく、ここではメタファは「根本的な認知能力のひとつ」の意味で使っているのではないかと考えます。

<sup>3</sup> 平成 20 年 5 月情報システム学会の年次総会の佐伯胖青山学院大学教授の講演より学びました。

や welfare を実現するには、多くの専門分野の技術や知見を束ねていく力が必要となります。この「複数の専門 (multiple disciplines) を束ねて、オープンにかつグローバルにコラボレーションすること」が時代の要請であることを認識します。筆者は、マネジメントのあり方も、emergent Leadership (湧き上がるリーダーシップ) が中心となると言う意味で、「チームによるマネジメント」がキーワードになると認識します。〔脚注<sup>4</sup>〕

情報技術が提供する要素技術を有効に活用するには、従来の縦割りで編成された組織や業界を超えた社会システムとしての枠組みやルールを創造することが前提として必要となります。それには政府の規制や制度の改訂と進歩を要求することも視野に入れる必要が出てきます。

- ICタグ(チップ)を例にとると、この技術は、食物の生産・輸送過程の履歴を時間と空間を広く越えて、情報の記録・表示によって消費者に情報の確認を可能とします。これを社会システムとして確立して運用するためには生産者から流通事業者そして小売業の人々がコンセプトを共有することから始まり、機器システムの導入への投資、そして適正に運用される消費者に信用・信頼されて利用されるためにはルールの遵守が前提として必須です。
- あるいは、都市の交通渋滞と二酸化炭素の排出削減を目的に、情報技術(IT)を交通システムの改善のために利用する取り組みがストックホルム市などで行われていると聞きます。〔脚注<sup>5</sup>〕この場合、渋滞課金という新たな仕組みと逆インセンティブのルールを社会システムの核として導入しています。その正確な運用のために、車を識別する技術とセンサー技術やカメラの技術が要素技術となり、一台一台の車の通行状況を時間帯と場所別にデータとして捕捉することが可能となったことが基礎となります。しかし同時に、プライバシー保護のために運転手の顔や姿は収集しない技術も取り入れられているとのこと。

このように情報化社会は、情報技術が中核的な要素技術となって空間と時間を従来になく広げ、人々が共有する情報空間の範囲と内容を限りなく拡大した社会を意味します。従って、その利用にあたっては、社会システムとしてビジネスモデルを具体的に実装可能な状況にまでデザインすることをコミュニティの構成員に要求する社会であることを意味します。実現に向けては、従来の縦割りの業界を超えること、および縦割りで政府がコントロールしてきた governmental regulation を超える新たな横割りの社会システムをデザインすることが必要となります。

このためには、制度や政策についての集団としての合意形成の力量が必要となります。情報社会は、「議論する力」「対話する力」の洗練を日本国民のすべてに求めるものと言ってよいのではないだろうか。

そこで、思考様式の変化の視点から見るときには、4つ言葉がキーワードとなると考えます。

- ・「オープン」で
- ・「グローバル」に
- ・「多様な専門(multiple discipline)」の人々と
- ・「協調行動(コラボレーション)」することです。

<sup>4</sup> Jon R. Katzenbach and Douglas K. Smith Harvard Business Review, 1993 (Best of HBR, Jul.-Aug. 2005, page 162 ~ )

<sup>5</sup> 平成 20 年 8 月 6 日日経産業新聞主催のフォーラム 2008「イノベーション・オンライン キックオフ フォーラム」での日本IBMでの事例紹介から。

すなわち「フラット化」社会という標語により情報社会の特質を表すことができます。〔脚注<sup>6</sup>〕

**【表 1】フラット化の時代 水平思考の社会へ**

**- 世代（年齢）**

Web & Mobile がプラットフォーム  
若い人々が中心のビジネスモデル創造で発展

**- 人種・民族**

市場・サプライチェーン・資本の世界分業・一体化、人材開国  
多民族・文化的背景の人々との生活レベルでの交わり

**- ジェンダー**

女性雇用参加増・ワークライフバランス  
ジェンダーフリーな発想での社会的行動原理

**- 専門を超えた学際的思考を必要とする**

地球温暖化対策は経済・社会システムの変更を要請  
様々な専門力を統合していくコンプレックスを要請

**【図 4】情報社会の学習（教育）のあり方**

- 学習は個人と共同体の関わりの中で生じる。
- 知識は共同体に分かち持たれている。
  - 周囲の人間や人工物が重要な媒体（媒介）
  - 互いに知恵を交換

**工業社会と情報社会における学習（教育）の特質**

	工業社会	情報社会
基本	大多数が既成の手順に従い課題を処理することができる社会	あらゆる人間に概念的理解と意図的な知識の生産を求める社会
手法*	知識の移転	知識の構築
形態*	個人	コラボレイティブ(協働)
ゴール*	基本スキルとアルゴリズムの概念獲得	概念獲得と意図的な知識の構築
性質*	生来的、カテゴリー	トランザクショナル、歴史的
対象*	エリート選考、大多数の基礎教育	大多数の生涯学習のモデル
想定*	工場モデル、垂直型階層組織	協働的に学習する組織

また、情報社会が、分散された知能の時代であるならば、学習のあり方（教育課程のあり方）の重点についても上記の【図 4】のような対比で、語られることになります。〔脚注<sup>7</sup>〕

**基本に立ち返る**

本稿の締めくくりとして、次の点を指摘して終わりたいと考えます。

筆者が最近読んだ本に、姜尚中（Kang Sang-jung）氏〔脚注<sup>8</sup>〕の「悩む力」があります。その序章の中で「戦争を挟んだ相似形」として、世紀の変わり目の 20 世紀と今日の 21 世紀との間の類似点を指摘しています。その発想に習って、明治期の福沢諭吉先生の「文明論の概略」を紐解くと、冒頭の緒言は「文明論とは、人の精神発達の議論なり」の言葉から始まります。「その趣意は、一人（いちにん）の精神発達を論ずるにあらず、天下衆人の精神発達を一体に集めて、その一体の発達を論ずるなり」と続きます。

問題は、それがあること自体が問題なのではなくて、問題として気づかないとか、認識できないとき、解決することができないことが、本当の「問題である」と認識します。「文明を開き、経済と文化の発展」を継続的に図り、さらに国際的な貢献をする中で地球規模にきちんと位置づけられる日本人となるためには、新たな時代環境が要求する基本要件を研究して、「問題であることに気づき認識できる力と自身の解決能力を開発する自立的な能力」を研鑽することがもっとも基本的な部分の課題ではないでしょうか。その意味で、本質的な力量を左右するものが何かと問えば、筆者は、情報化社会とグローバル化への対応のための適応能力の 2 点にかかっているのではないかと認識します。

以上  
(メルマガ第 5 回)

<sup>6</sup> 「フラット化する世界 (The world is flat.)」トーマス・フリードマン

<sup>7</sup> 出典：伊東武彦 駒沢女子短期大学研究紀要第 32 号、並びに\*Keating (1995)筆者訳

<sup>8</sup> 東京大学大学院情報学環教授